

熊本県文化財調査報告第 259 集

# 宇土城跡（城山）

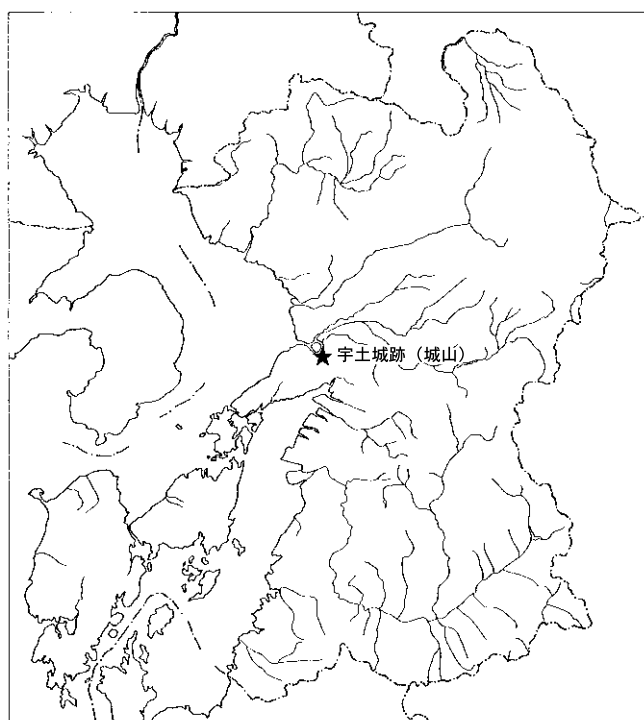
熊本県立宇土高等学校併設型中高一貫教育施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

熊本県教育委員会

# 宇土城跡（城山）

熊本県立宇土高等学校併設型中高一貫教育施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2011

熊本県教育委員会

## 序 文

熊本県教育委員会では、平成20年度に熊本県立宇土高等学校併設型中高一貫教育施設整備事業に伴い、宇土市古城町に所在する宇土城跡（城山）の発掘調査を実施しました。

調査の結果、僅かではありますが、中・近世を中心とする遺物のほか、宇土城（城山）の築城や改修に伴うものと考えられる整地層が確認されました。

この報告書が、生涯学習の教材として広く県民の皆様に活用されるとともに、埋蔵文化財保護に対する認識と理解を深めていただくための一助となれば幸いです。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大な御協力をいただいた県高校教育課、県立宇土高等学校、宇土市教育委員会及び地元関係者の皆様、また御指導・御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成23年 3月31日

熊本県教育長 山本隆生

## 例 言

- 1 本書は、熊本県宇土市古城町に所在する宇土城跡（城山）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、熊本県立宇土高等学校併設型中高一貫教育施設整備事業に伴う調査として、熊本県教育庁高校教育課の依頼を受けて、熊本県教育庁文化課が実施した。
- 3 現地での調査は、平成20（2008）年度に実施し、能登原孝道が担当した。
- 4 現地での図面作成及び写真撮影は、能登原、牛島晋治、多賀晴司、波多野芳郎、大森紘、桑島幸平が分担して行った。
- 5 遺構製図は、佐藤淳子、加藤早織が行った。
- 6 国土座標軸による測量基準杭の設定は、（有）坂井設計コンサルタントに委託した。
- 7 整理及び報告書作成は平成21（2009）年度から平成22（2010）年度にかけて熊本県文化財資料室で行った。遺物実測は江見恵留、府内博子、松本裕子、宮崎典子が行い、遺物製図は佐藤、府内が行った。
- 8 遺物写真撮影は村田百合子が行い、福浦晶子、手嶋裕子、松本、府内が補助した。
- 9 本書の周辺遺跡地図に掲載した地図は、国土地理院発行の宇土1；25,000地形図である。
- 10 本書の執筆・編集は、熊本県教育庁文化課で行い、能登原が担当した。
- 11 出土遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室にて保管している。

## 凡 例

- 1 本書では、中世の宇土城と区別するため、近世の宇土城を「宇土城（城山）」と呼称し、その遺跡名を「宇土城跡（城山）」とする。なお、宇土市指定史跡の指定名称は「宇土城跡（小西城）」であるが、内容的には同一のものを示す。
- 2 平面直角座標は、世界測地系を使用している。方位は、座標軸を基準とした座標北を示している。
- 3 本書に使用したレベル（L＝）は標高を示す。
- 4 本書に掲載した遺構配置図の縮尺は350分の1、土層断面図は40分の1で図示した。
- 5 報告書に掲載した遺物実測図及び拓本の縮尺は3分の1である。
- 6 土層及び土器の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」（日本色研事業株式会社；2004年版）に準拠した。
- 7 写真の縮尺は任意である。

## 目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査及び整理の組織	1
第3節 調査の方法と過程	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3節 宇土城跡（城山）について	6
a. 宇土城（城山）の歴史	
b. 宇土城跡（城山）の発掘調査	
第3章 調査の成果	8
第1節 はじめに	8
第2節 遺構について	10
第3節 遺物について	10
第4章 総括	13
参考文献	
出土遺物観察表	
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 宇土城跡（城山）周辺遺跡分布図	4
第2図 宇土城跡（城山）地形測量図及び調査区位置図	8
第3図 宇土城跡（城山）遺構配置図	9
第4図 宇土城跡（城山）土層断面図	9
第5図 出土遺物実測図（1）	11
第6図 出土遺物実測図（2）	12

## 表 目 次

表 1	宇土城跡（城山）周辺遺跡一覧表	5
表 2	これまでの宇土城跡（城山）における発掘調査一覧表	7
表 3	出土遺物観察表	14

## 写 真 図 版

図版 1	調査前調査区全景（西から）
図版 2	土層断面（A - A'）
図版 3	1 区検出状況（東から）
図版 4	2 区検出状況（西から）
図版 5	3 区検出状況（東から）
図版 6	5 区検出状況（北から）
図版 7	8 区検出状況（南から）
図版 8	9 区検出状況（南から）
図版 9	10区検出状況（南から）
図版10	13区検出状況（西から）
図版11	14区検出状況（東から）
図版12	調査完了状況（西から）
図版13	出土遺物（1）【弥生時代】
図版14	出土遺物（2）【古墳時代】
図版15	出土遺物（3）【中世】
図版16	出土遺物（4）【中・近世】
図版17	出土遺物（5）【中・近世】
図版18	出土遺物（6）【近世・近代】

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査にいたる経過

熊本県立宇土高等学校内において、県高校教育課により、併設型中高一貫教育施設整備事業に伴う技術・家庭科棟の建替事業が計画された。

この事業予定地が、周知の埋蔵文化財包蔵地「宇土城跡（城山）」に該当するとともに、宇土市指定史跡「宇土城跡（小西城）」の指定地内に該当したことから、県高校教育課から県文化課に対して、埋蔵文化財の所在の有無に関する照会があった。そこで、県文化課では、遺構の状況・規模等を確認するため、宇土市教育委員会に市指定史跡内における現状変更等許可申請を行い、許可を得た上で、平成19年12月3日及び平成20年1月9日に確認調査を実施した。その結果、技術・家庭科棟の建替予定箇所より、整地層及び遺物が確認され、調査終了後、埋蔵文化財確認調査結果を県高校教育課に通知するとともに、宇土市教育委員会に報告した。これを受け、県高校教育課、県文化課、及び宇土市教育委員会の間で、埋蔵文化財の保護に対する検討・協議を実施した結果、新たな校舎の建設については、既存の建物の基礎部分を最大限に利用し、基礎等が遺構面まで達しない設計に変更して埋蔵文化財を保護することで一致した。

建物の設計変更により、遺跡は保存されることとなったが、宇土市文化財保護審議会から、新たな建物の基礎が遺構面にまで達しはしないものの、その部分については遺構面の状況を確認したほうがよいとの意見が出された。そこで、改めて県高校教育課等と協議を実施した結果、遺構面の状況を確認するための最小限の発掘調査を実施することとなった。調査は、宇土市教育委員会の現状変更等許可を受けた上で、平成21年3月2日に開始し、同年3月31日までの約1ヶ月間実施した。

### 第2節 調査及び整理の組織

#### 確認調査

##### 【平成19（2007）年度】

調査責任者 梶野英二（文化課長）  
調査総括 江本直（課長補佐） 西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）  
調査担当 廣田静学（参事） 木村元浩（参事）  
調査事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐） 高宮優美（主幹兼総務係長） 塚原健一（参事）  
高松克行（主任主事）

#### 本調査

##### 【平成20（2008）年度】

調査責任者 米岡正治（文化課長）  
調査総括 江本直（課長補佐） 西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）  
調査担当 能登原孝道（学芸員） 牛島晋治 多賀晴司 波多野芳郎 大森紘 桑島幸平（以上非常勤職員）  
調査事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐） 川上勝美（主幹兼総務係長） 山田京子（参事）  
高松克行（主任主事）

### 整理・報告書作成

#### 【平成21（2009）年度】

整理責任者 米岡正治（文化課長）  
整理総括 木崎康弘（課長補佐） 西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）  
整理担当 能登原孝道（学芸員） 加藤早織 江見恵留（以上非常勤職員）  
整理事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐） 辛川雅弘（主幹兼総務係長） 山田京子（参事）  
高松克行（主任主事）

#### 【平成22（2010）年度】

整理責任者 小田信也（文化課長）  
整理総括 木崎康弘（課長補佐） 西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）  
整理担当 能登原孝道（学芸員） 佐藤淳子 江見恵留（以上非常勤職員）  
整理事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐） 元嶋茂（課長補佐） 山田京子（参事）  
松島英樹（主任主事）

### 調査指導及び協力者（敬称略）

高木恭二 藤本貴仁 重岡忠希 降矢哲男 島津義昭 野田拓治 西住欣一郎  
廣田静学 木村龍生 熊本県高校教育課 熊本県立宇土高等学校 宇土市教育委員会  
堤 伴治（柳川市教育委員会）

### 調査・整理作業員（敬称略・五十音順）

発掘調査 安達求 小畑律子 田中国義 中川道治 橋本チエ子 福田フミエ  
古山節子 村山艶子  
室内整理 青木美代子 柴田クミ子 田中さつき 手嶋裕子 富田知子 西坂和美  
原田春子 藤田繁子 府内博子 松本直枝 松本裕子 宮崎典子



### 第3節 調査の方法と過程

発掘調査は、平成21年3月2日より同年3月31日まで、熊本県立宇土高等学校内の技術・家庭科棟建替予定地において実施した。関係部局との事前協議の結果、建物の設計変更等により、遺跡の保存が図られたため、今回の調査は、遺跡の保存を前提とした上で、建物の基礎が入る部分（441㎡）について、その下部に存在する遺構面の状況等の確認を行うことを目的とした。よって、調査に伴う掘削は最小限のものとし、最上面の遺構面を検出した段階で掘削を止め、遺構の検出、実測図の作成、写真撮影を実施した。

調査は、まず重機による表土掘削後、調査区を便宜上16の調査区に分け、遺構検出を実施した。調査区内を掘り下げたところ、ほとんどの箇所が旧校舎の基礎によって攪乱を受けており、遺構の確認は難しい状態であったが、その中でも攪乱を受けていない箇所を探し、図面、写真による記録を行った。遺構の実測図は、1/20の縮尺で作成し、写真撮影は、遺構検出段階等において適宜モノクロとカラーで、小型カメラと中型カメラを使用して実施した。また、調査期間中は、宇土高等学校の生徒や教職員等に対して、調査の目的や成果等について随時説明や掲示を行うなどして、埋蔵文化財保護の普及・啓発活動を実施した。なお、調査終了後は遺構面を厚さ10cmほどの山砂で覆い、遺構等の保護を図った。

調査の過程は以下のとおりである。

#### 【平成21（2009）年】

- 3月2日 重機による表土剥ぎを開始。予測していた以上に建物の基礎による攪乱が多い。表土下10～20cmからは、近代の瓦片が多数出土。
- 4日 4級基準点及びメッシュ杭設置作業を開始。
- 5日 表土剥ぎ終了。
- 9日 作業員初出勤、現場周辺の安全管理を行う。
- 12日 作業員による発掘作業開始。
- 16日 県文化課の島津主幹来訪。
- 17日 遺構検出作業を開始。県高校教育課の重岡氏、県文化課の木村主任学芸員来訪。
- 18日 遺構検出終了。遺構検出状況の写真撮影開始。宇土市教育委員会の高木氏、藤本氏、県文化課の西住主幹、廣田参事来訪。
- 23日 遺構実測を開始。茶道資料館（京都市）の降矢氏来訪。
- 24日 この日より非常勤職員の多賀、波多野に実測・写真撮影の応援に来てもらう。
- 25日 非常勤職員の大森、桑島が応援に加わる。
- 26日 遺構実測及び写真撮影が全て終了。
- 27日 重機による埋め戻し作業を実施。宇土市教育委員会に調査終了の挨拶。
- 30日 プレハブ事務所を撤収。調査機材・遺物等の搬出準備。
- 31日 作業員による作業最終日。調査機材・遺物等の搬出作業。宇土高等学校に調査終了の挨拶。

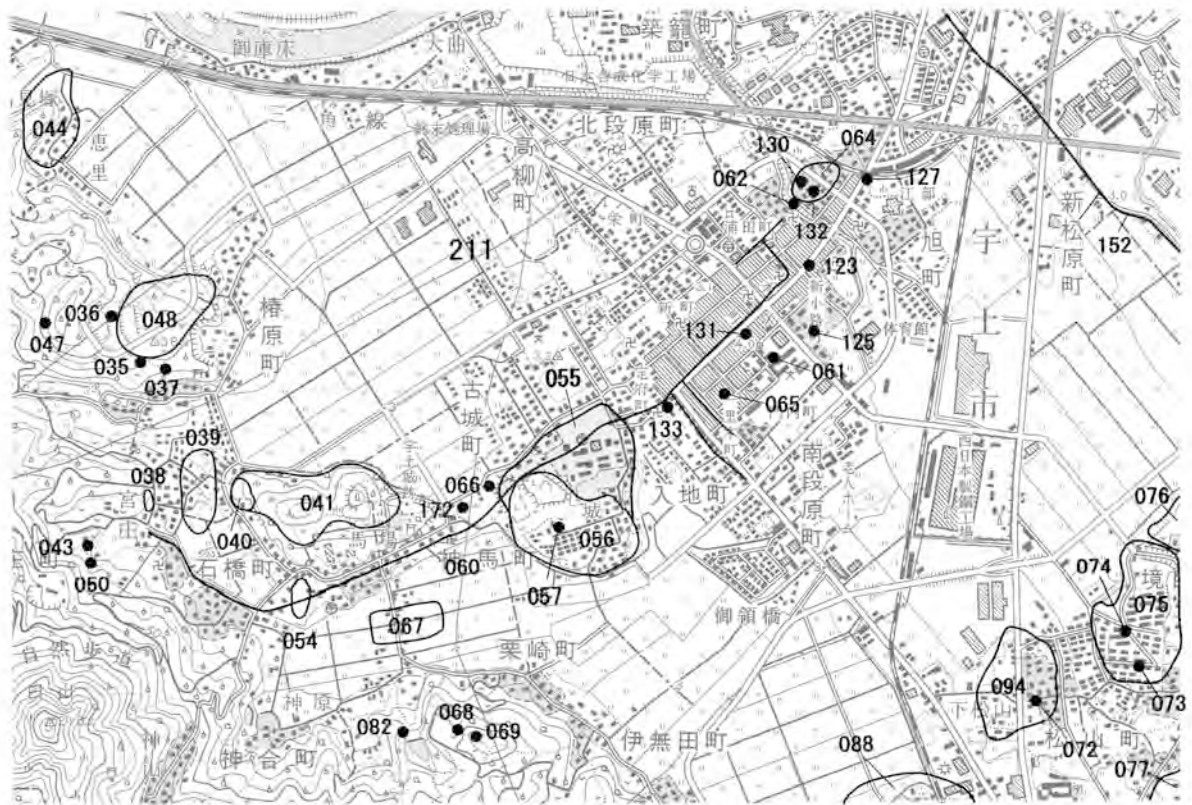
## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

宇土城跡（城山）の所在する宇土半島は、九州の中央部にあって、東西に長く、北を有明海、南を八代海（不知火海）に挟まれており、東西約20km、南北約9 km、面積約125km<sup>2</sup>をはかる。この宇土半島は、内帯と外帯を分ける中央構造線の臼杵－八代構造線と大分－熊本構造線に挟まれた地域に属しており、いずれの構造線も東北東－西南西の方向で走る。宇土半島基部から突端にかけては、白亜系、古第三系がほぼ北東方向の走向で、北西に傾斜している。新第三紀（鮮新世）から第四紀（更新世）にかけて、大岳、三角岳を中心とした火山活動による安山岩類及び凝灰角礫岩類は、これらの白亜系、古第三系を不整合に覆って分布している。また、山麓及び谷沿いには阿蘇の火山活動による火山噴出物の堆積物が分布しており、古墳時代に石棺の石材として利用された「馬門石」と呼ばれる溶結凝灰岩もその一つである。

宇土地域の北側には、総流路延長71.25kmをはかる緑川が東から西に貫流し、その南側には緑川の支流である浜戸川が東から西に流れている。流域周辺は両河川の堆積によってできた沖積平野が広がっており、北に熊本平野、南に八代平野につながる。

宇土城跡（城山）は、この緑川等の堆積作用によって形成された沖積平野の南側、通称「城山」と呼ばれる標高約16mの独立丘陵上に位置する。



第1図 宇土城跡（城山）周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

## 熊本県 (43) 宇土市 (211)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
035	椿原貝塚	椿原 甲塚	縄文	貝塚	
036	椿原古墳	椿原 西園	古墳	古墳	装飾古墳・方墳
037	椿原石蓋土墳墓	椿原 西園	古墳	埋葬	
038	北平遺跡	宮の庄 北平	弥生	包蔵地	甕棺
039	轟貝塚	宮の庄 居屋敷	縄文	貝塚	縄文(轟式)土器・石器・人骨多数
040	西岡台貝塚	宮の庄 西岡	縄文	貝塚	ドングリ貯蔵穴
041	宇土城跡(西岡台) 西岡台遺跡	神馬 千畳敷	古墳・中世	包蔵地	古墳時代V字溝 中世の宇土城跡(西岡台)は国指定史跡
043	泰雲寺跡	宮の庄 平床	中世・近世	寺社	細川家菩提寺跡、歴代墓所
044	恵里遺跡	恵塚 村下	古墳～中世	包蔵地	
047	金嶽山古墳	椿原 金嶽	古墳	古墳	横穴式石室
048	椿原遺跡	椿原 内園ほか	弥生～中世	包蔵地	
050	細川家墓地	宮の庄 平床	近世	墓地	宇土細川家歴代藩主の墓所
054	陣の前遺跡	石橋 陣の前	弥生～中世	包蔵地	
055	宇土城跡(城山)	古城 古城	近世	城	天正17(1589)年頃、小西行長によって築城
056	宇土城跡城山遺跡	古城 古城	縄文～近世	城	
057	古城甕棺	古城 古城	弥生	埋葬	宇土城跡城山遺跡に含まれる。
060	轟泉水道	宮庄ほか	近世	建造物	宇土藩初代藩主細川行孝により建設。現役の上水道では日本最古。
061	温知館跡	新小路 門内	近世	包蔵地	宝暦年間に設立した藩校
062	船場橋	船場 船場	近世	建造物	石造の単一のアーチ橋
064	石ノ瀬遺跡	石小路 石ノ瀬	縄文～中世	包蔵地	遺物包蔵地
065	長屋門	新小路 門内	近世	建造物	高月家
066	古城古墳	古城 古城	古墳	古墳	円墳 横穴式石室
067	馬場遺跡	神合 馬場下	縄文	包蔵地	縄文土器・須恵器・木器
068	猫ノ城古墳	栗崎 立久佛	古墳	古墳	円墳
069	城ノ越古墳	栗崎 城ノ越	古墳	古墳	前方後円墳 三角縁四神四獣鏡出土
072	畑中古墳	松山 桶底	古墳	古墳	
073	境目石棺群	境目 西原	古墳	埋葬	箱式石棺
074	境目甕棺	境目 西原	弥生	埋葬	弥生土器・甕棺・土師器・須恵器
075	境目遺跡	境目 西原	縄文～中世	包蔵地	甕棺
076	善導寺遺跡	善導寺	縄文～中世	包蔵地	
077	山内遺跡	松山 北山内	縄文～中世	包蔵地	
082	神合古墳	神合 追ノ前	古墳	古墳	円墳 埴輪出土
088	下松山遺跡	松山 巖島ほか	弥生	包蔵地	重弧文土器
094	畑中遺跡	松山 松下	弥生	埋葬	甕棺
123	樹徳斎跡	本町	近世	包蔵地	温知館卒業した者の高等教育の藩校
125	宇土細川藩陣屋敷	新小路	近世	包蔵地	細川宇土藩の陣屋敷
127	番所跡	石瀬	近世	包蔵地	薩摩街道の宇土町熊本側の番所跡
130	石瀬古城跡	石瀬	中世	城	中世城跡
131	三丁目御門跡	本町	近世	包蔵地	
132	宇土藩御蔵跡	石瀬	近世	包蔵地	
133	御高札場跡	本町	近世	包蔵地	
152	薩摩街道	花園	近世	交通	薩摩島津家が参勤交代の際に使用した街道

表1 宇土城跡(城山)周辺遺跡一覧表

## 第2節 歴史的環境

宇土城跡(城山)周辺には縄文時代より近世に至るまでの遺跡が数多く残されている(第1図)。

本遺跡周辺の主な縄文時代の貝塚・遺跡としては、轟貝塚、西岡台貝塚、馬場遺跡、石ノ瀬遺跡などがある。轟貝塚は、九州を代表する縄文時代の貝塚の一つで、縄文時代早期末から前期の「轟式土器」の標識遺跡でもある。大正時代以来、数次にわたる発掘調査が実施され、大量の土器や、石器、貝製品、漁具、骨角器などが出土した。西岡台貝塚は、宇土城跡(城山)の西方に位置する西岡台と呼ばれる標高約39mの独立丘陵の西南部斜面に所在する貝塚である。これまでの発掘調査で、縄文時代前期以降のものと思われるドングリなどの貯蔵穴が5基検出された。馬場遺跡からは縄文時代前期の曾畑式土器が出土し、石ノ瀬遺跡からは早期の土器群が出土している。また、時期は明確ではないが、椿原貝塚が周辺に所在する。

弥生時代の遺跡としては、中期後半の黒髪式土器が出土した北平遺跡、朝鮮系無文土器が出土した石ノ瀬遺跡、大型甕棺墓が検出された境目遺跡、畑中遺跡などがある。また、宇土城跡(城山)と同じ丘陵上に所在する宇土城跡城山遺跡からは、前期の環濠や中期の甕棺墓が検出されたほか、終末期の土器が大量に出土

し、弥生時代における拠点集落であった可能性が高い。善導寺遺跡からは前期末から中期初頭の土器がまわって出土した。下松山遺跡からは重弧文土器が出土しており、後期の集落と考えられる。

古墳時代には、西岡台遺跡において大規模なV字溝が巡る首長居館が造営される。古墳としては、三角縁四神四獣鏡が出土した前期の前方後円墳である城ノ越古墳が著名であり、他に、前期の円墳と考えられる神合古墳や猫ノ城古墳、終末期の線刻をもつ装飾古墳で同時期における県下唯一の方墳である椿原古墳、中期のものと考えられる椿原石蓋土壙墓などがある。恵里遺跡や椿原遺跡は古墳時代の包蔵地である。

古代には、西岡台遺跡や宇土城跡城山遺跡で須恵器や土師器が出土しており、西岡台遺跡では、頭から左前脚の部分が残った須恵器質の土馬が出土した。また、境目遺跡からは石製丸軻や瓦などが出土しており、公的施設が存在した可能性がある。

中世には、西岡台に宇土氏、名和氏の居城である宇土城（西岡台）が築城された。宇土城（西岡台）は永承3（1048）年に築城され、その後、菊池氏の一族が代々居城したとの伝承がある。中世にかけて宇土氏、名和氏と城主が続いた後、天正16（1588）年には肥後南半国を与えられた小西行長が城主となった。小西行長は、その翌年には宇土城（城山）の築城に着手し、中世の宇土城（西岡台）は廃絶された。これまでの主郭（千畳敷地区）やその西側の曲輪（三城地区）における発掘調査で、掘立柱建物跡や堀跡、門跡などが検出されるとともに、大量の土師質土器や瓦質土器のほか、青磁や白磁などの貿易陶磁器が出土した。

近世になると、小西行長によって宇土城（城山）が築城されたが、行長が関ヶ原の戦いで敗れた後、加藤清正によって大規模な改修が行われた。その後、慶長17（1612）年に水俣城や愛藤寺城とともに廃城となり、さらに、寛永14（1637）年の天草・島原の乱の後、再度の破却を受けた。これまでの本丸跡等における発掘調査において破却された石垣等が検出されたほか、大量の瓦や貿易陶磁器などが出土している。正保3（1646）年には、熊本藩初代藩主細川忠利の甥にあたる細川行孝が宇土郡3万石を分封され、新小路町に陣屋敷を構えた。陣屋敷跡周辺には、温知館跡や樹徳齋跡などの藩校跡のほか、番所跡や御蔵跡、高札場跡、門跡などが残る。また、陣屋敷の東方には近世に整備された薩摩街道が南北に走る。寛文3（1663）年には、細川行孝によって轟水源をその水源とする轟泉水道が敷設された。轟泉水道は現役では日本最古の上水道であり、現在でも生活用水として利用されている。轟水源の西南には宇土細川家の墓所が所在する。

### 第3節 宇土城跡（城山）について

#### a. 宇土城（城山）の歴史

宇土城（城山）は、天正16（1588）年に肥後南半国の領主となった小西行長によって、その翌天正17（1589）年頃から築城が開始されたとされる。築城に際して行長は、領内の土豪に人夫、資材等を要求し、この命令に従わなかった志岐麟泉をはじめとする天草五人衆は反乱を起こしたが、行長や加藤清正らによって平定されている。行長は、宇土城（城山）の築城に際し、城本体だけでなく、武家屋敷、城下町、堀等が有機的に結合した「惣構」を有する城郭を築城した。宇土城（城山）の規模は、主郭が東西150m、南北130m程、外郭が東西500m、南北350m程をはかり、城門を5ヶ所に配置した。その後、慶長5（1600）年に関ヶ原の戦いが起きると、行長は西軍方につき、敗戦後、刑死した。この間、宇土城（城山）は行長の弟の小西行景（長元・隼人）によって守られていたが、東軍方についた加藤清正によって攻められ、約1ヶ月間の籠城戦の後、開城させられている。

関ヶ原の戦い後、肥後国主となった加藤清正により、その隠居城として、宇土城（城山）は新たに縄張りとなされ、大規模な普請が行われたが、清正の死後、慶長17（1612）年に、肥後国内の水俣城、愛藤寺城と

ともに破却された。なお、寛永9（1632）年、加藤家は2代忠広の代に改易となり、その後肥後国は細川家の支配するところとなる。寛永14（1637）年には、天草・島原の乱が起こったが、その平定後、一揆による立て籠もり等を防ぐため、再度の破却が行われたとされる。後に、宇土には、正保3（1646）年に宇土藩が成立したが、宇土城（城山）は宇土藩主の居城としては使用されず、新たに本町筋の東側に陣屋敷が構築され幕末を迎えた。

#### b. 宇土城跡（城山）の発掘調査

宇土城跡（城山）では、これまで富樫卯三郎氏、宇土高校社会部や宇土市教育委員会等によって昭和38（1963）年以降以下のとおり調査が行われてきた。

これまでの調査は、本丸跡とその南側の三ノ丸地区を中心に行われており、本丸跡の東側の三ノ丸地区において調査が行われるのは今回の調査が初めてとなる。

調査年	調査主体	調査内容	参考文献
昭和38(1963)年	富樫卯三郎氏・宇土高校社会部	弥生中期甕棺等	富樫・佐藤・村井1964「宇土市発見の石蓋甕棺」『九州考古学』20・21号
昭和41(1966)年	〃	弥生前期末貯蔵穴等	富樫卯三郎1970「弥生時代の貯蔵穴－宇土城跡の崖面出土－」『石人』11－1
昭和43(1968)年	〃	〃	
昭和44(1969)年	〃	三ノ丸石垣	
昭和46(1971)年	〃	〃	卯野木盈二1977「宇土城（小西城）調査報告」『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
昭和48(1973)年	〃	〃	
昭和55(1980)年	熊本県教育委員会	本丸石垣、堀	宇土市教委1981「熊本県教育委員会の調査」『宇土城跡（城山）－宇土城跡（城山）調査概報（1）－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集
昭和56(1981)年	宇土城三ノ丸跡発掘調査団	三ノ丸・弥生前期末環濠	宇土城三ノ丸跡発掘調査団1982『宇土城三ノ丸跡－弥生前期のV字溝と近世城郭遺構の調査－』
昭和53(1978)～昭和59(1984)年	宇土市教育委員会	本丸・三ノ丸	宇土市教委1981『宇土城跡（城山）－宇土城跡（城山）調査概報（1）－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇土市教委1982『宇土城跡（城山）－宇土城跡（城山）調査概報（2）－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集 宇土市教委1985『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集

表2 これまでの宇土城跡（城山）における発掘調査一覧表

## 第3章 調査の成果

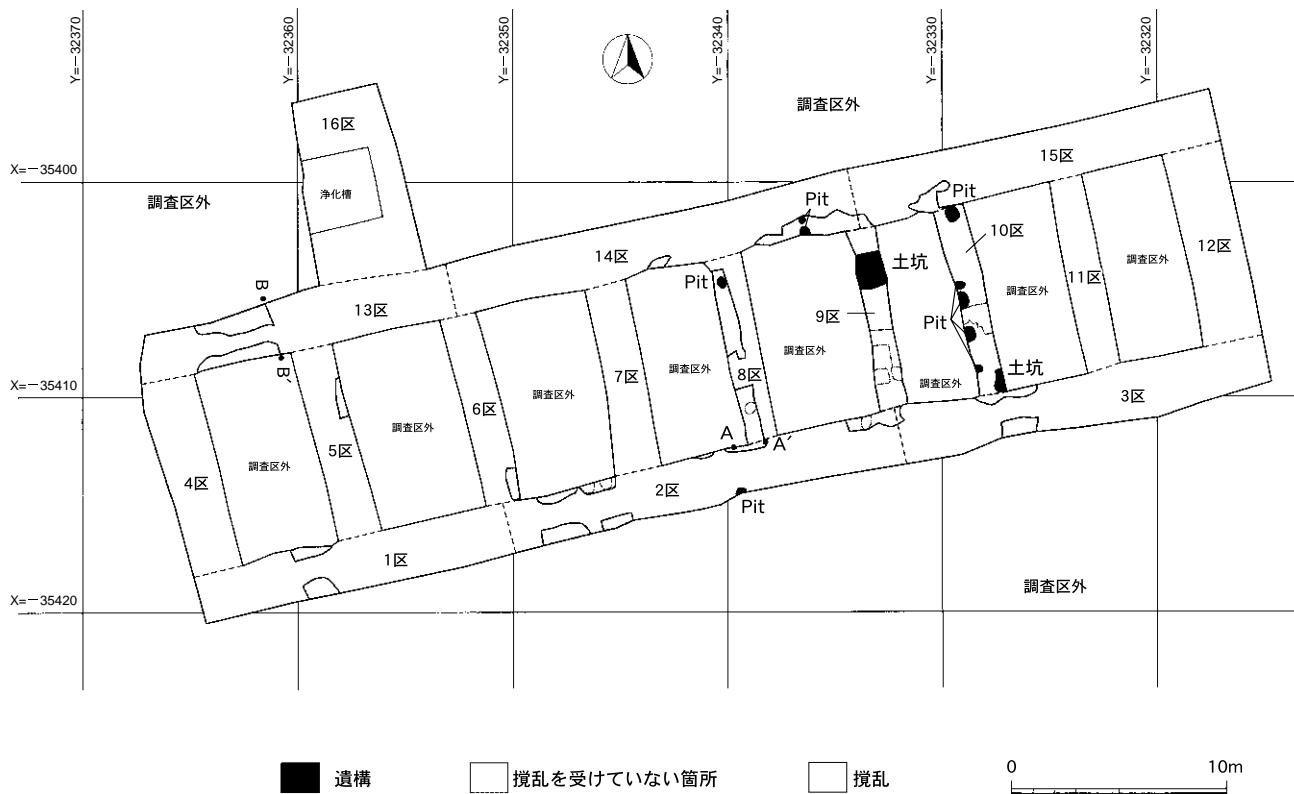
### 第1節 はじめに

今回の発掘調査は、遺跡の保存を前提とした上で、新たな校舎建物の基礎が入る部分の下部に存在する最上面の遺構面の状況を確認することを目的とした。そのため、調査範囲は、新たに基礎が入る部分のみの最小限の範囲とし、結果的に調査区は、面的な広がりをもつものではなく、梯形にトレンチを入れるような調査区となった。また、校舎建物の基礎が遺構面まで達しないように設計変更を行うなどして遺跡保存の措置がとられたため、調査区の掘削は最上面の遺構面までとし、その遺構面の状況を記録することとした。なお、遺構が確認されても、遺構の掘削は行わず、その平面プランの確認・記録まで行うこととした。

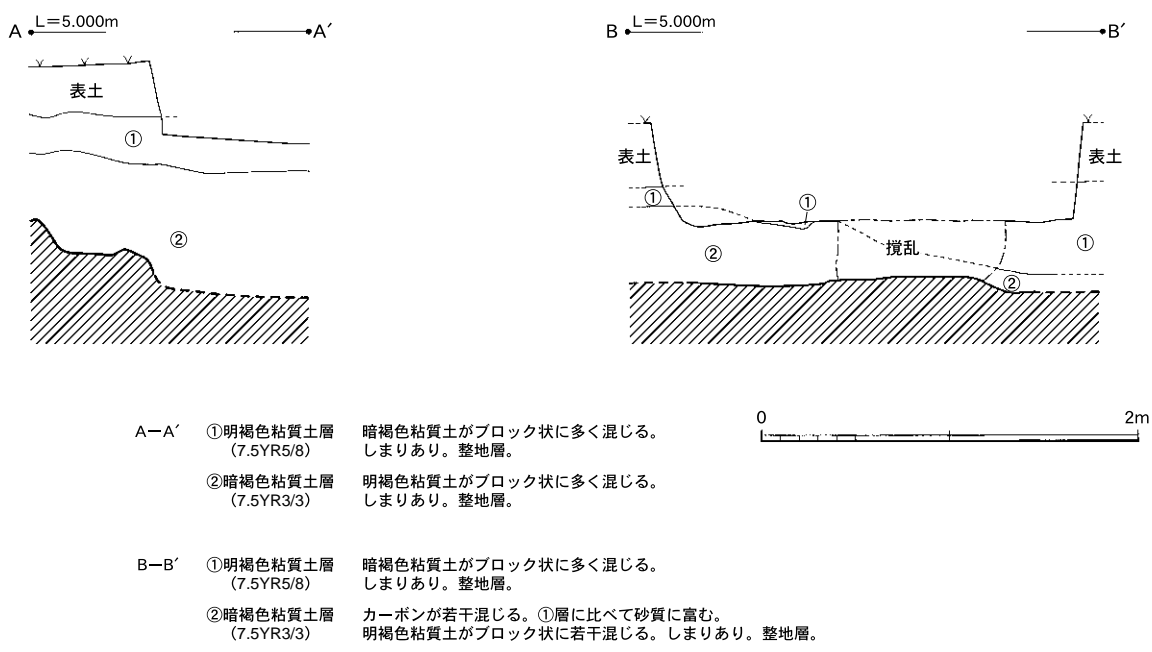


第2図 宇土城跡（城山）地形測量図及び調査区位置図(S=1/4,000)

(宇土市教委 1982 『宇土城跡(城山)』Fig 2を再トレース、一部改変)



第3図 宇土城跡（城山）遺構配置図 (S=1/350)



第4図 宇土城跡（城山）土層断面図 (S=1/40)

本調査区は、宇土城跡（城山）の本丸東側、三ノ丸と想定される区域の一角にあたり、文献資料や地割の検討などから、小西行長の重臣クラスの屋敷地であったことが想定されている場所に該当する。よって、今回の発掘調査により、建物に関わる遺構が検出されることが想定された。しかし、遺跡保存のための校舎建物の設計変更により、新たな基礎を概ね既存の校舎建物の基礎部分におさめることとしたため、新たな基礎が入る箇所を対象とした調査区は既存建物の基礎によって大きく攪乱を受けているであろうことも予測された。

実際に重機及び人力で表土を剥いだところ、建物基礎による攪乱は事前の予測以上のものであり、実に調査区全体の2/3以上が攪乱を受けていた。その中で、攪乱によって壊されずに残っている文化層の面を確認しながらその箇所を実測図に記録した。なお、調査に際して、便宜上、調査区を16の区に分割して調査を実施した。また、遺物の出土は、遺構の掘削を行っていないこともありほとんどなかった。今回報告する遺物は、攪乱の中から出土した近世以前のものがほとんどであるが、若干の遺物が清掃中に文化層の中から出土した。

## 第2節 遺構について

調査区内のほとんどが攪乱を受けていたこと、また、調査区の範囲が極めて限られていたことから、建物跡等の明確な遺構は確認できなかった。

表土中からは、部分的に焼土とそれに伴って近代の瓦片が多量に検出された。昭和10年と昭和18年の2度にわたって、現在の宇土高等学校と同じ敷地内に存在した旧制宇土中学校の校舎が火災に遭っており、その火災に伴う焼土と瓦片と考えられる。そのうちの刻印が残っていた瓦片1点を実測し、本報告書に記載している。

表土を取り除いて確認できた遺構は、2区でピット1基、8区でピット1基、9区で土坑1基、10区で土坑1基、ピット5基、14区でピット2基のみである。便宜上、直径1m以上のものを土坑とし、1m未満のものをピットとして区分した。しかし、いずれも検出まで行い、掘削は行っていないため、深さ及び遺構の性格等は明確ではない。なお、9区で検出された土坑は、当初、検出段階で約164cmの幅で東西方向に直線的に延びていたことから、溝状の遺構ではないかと想定したが、隣接する8区及び10区でその延長が確認できなかったため、土坑の可能性が高いと判断した。また、ピットも合計9基検出されたが、それらが建物の柱穴等の遺構になるかどうかは明確ではない。

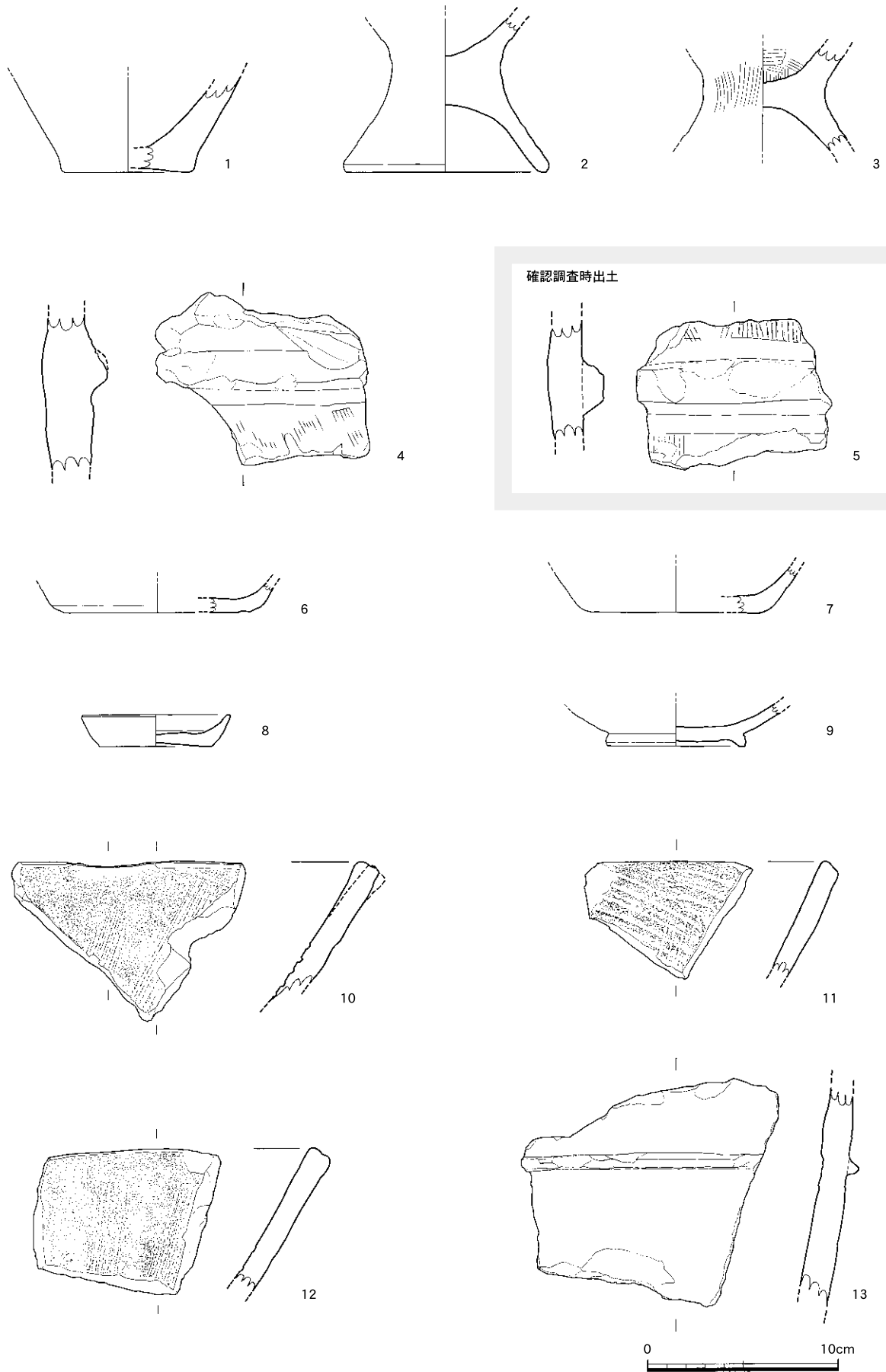
また、攪乱によって削られた部分を利用して土層断面を確認したところ、第4図のとおり、表土を除き、2層に分層することができた。1層は明褐色粘質土に暗褐色粘質土がブロック状に入る層であり、かなりしまりがあった。2層は、1層とは逆に、暗褐色粘質土に明褐色粘質土がブロック状に入る層であり、こちらもかなりしまりがあった。1層、2層ともに、硬くしまりがある層であることから、整地層である可能性が高いものと考えられる。また、1層より中・近世の瓦質挿鉢片が出土したことから、この整地層は宇土城（城山）の築城時、あるいは改修時に伴うものである可能性が高いものとする。

## 第3節 遺物について

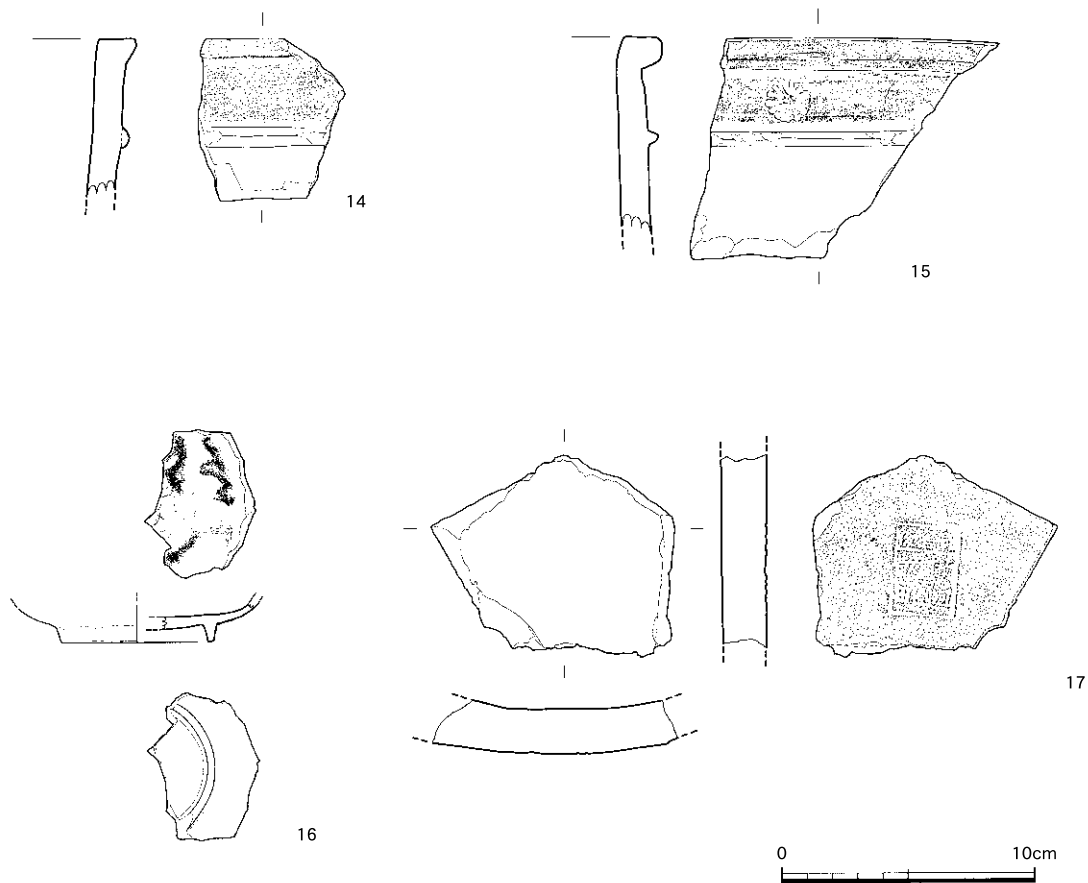
今回の調査区は、そのほとんどが攪乱を受け、また、調査を遺構検出のみにとどめたことから、遺物の出土は僅かであった。また、出土した遺物のほとんどは攪乱からの出土である。

1は、弥生土器の甕の底部である。13区の2層から出土した。丁寧なナデ調整が施してあり、底部の約1/2が残存する。2は、弥生土器の台付き甕の胴部～底部である。13区の攪乱中より出土した。ナデ調整が施





第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 出土遺物実測図(2)

してあり、底部の約1/4が残存している。3は、弥生土器の台付き甕の胴部～脚部である。15区の攪乱中より出土した。内外面ともにハケメ調整が施してある。4・5は、古墳時代の円筒埴輪である。4は、13区の2層から出土した。全体的に磨耗が激しいが、突帯の一部が残り、タテ方向へのハケメが一部残る。5は、平成19年度に実施した事前確認調査時に、4トレンチから出土したものである。台形状の突帯がつき、タテ方向へのハケメが一部残る。6～8は、土師器の皿である。6は、15区の攪乱中より出土した。底部はヘラ切り離しである。7は、7区の攪乱中より出土した。底部は糸切り離しである。8は、3区の攪乱中より出土した。内外面ともナデ調整が残る。9は、瓦器椀である。4区の攪乱中より出土した。内面に丁寧なミガキ調整が施してある。10～12は、瓦質播鉢である。10は、6区の攪乱中より出土した。緩い注口があり、その脇に指頭圧痕が残る。内面には6条の播目が施される。11は、6区の攪乱中より出土した。内面に現状で4条の播目が残る。12は、15区の1層より出土した。内面に6条の播目が残る。13は、瓦質の鍋と考えられる。6区の攪乱中より出土した。1条の細い突帯が巡る。14・15は、瓦質の火鉢である。14は、13区の攪乱中より、15は、15区の攪乱中より出土した。ともに口縁下に1条の突帯が巡り、口縁との間に菊花文のスタンプが入る。16は、染付皿の底部である。13区の攪乱中より出土した。高さ0.7cmの高台がつく。17は、近代の瓦である。調査区内の表土中より多量の瓦片が出土したが、そのうちの1点である。「筑後 柳河 村田製 散田」の刻印が入る。現在の福岡県柳川市三橋町蒲船津散田で製作されたものである。

## 第4章 総括

今回の宇土城跡（城山）における調査は、保存を前提とした確認調査であったため、調査面積等が限られていた上、調査区域の大部分が既存の建物基礎によって攪乱を受けており、制約の多い調査となった。

そのような中でも、今回の調査において整地層を確認できたことは大きな成果であったといえる。この整地層は、上下2層に分かれ、それぞれがかなり強くしまりがある状況が確認できた。整地層のうち第1層から中・近世の播鉢片が出土していること、また、今回の調査区は宇土城（城山）の縄張りのうち、有力な家臣団の屋敷があったと想定されている場所であることから、宇土城（城山）城域内の屋敷地造成に伴う整地層であった可能性が高い。しかし、2層に分かれる整地層が時期差を伴うものなのか、あるいは同時期の整地の工程差を示すのかについては明らかにすることができず、今後の検討課題といえる。仮に、これを時期差と考えるのであれば、それぞれ、小西行長による築城時のもの、加藤清正による改修時のものとも考えることができるのではないだろうか。

また、事前の確認調査トレンチと今回の本調査区から円筒埴輪片がそれぞれ1点ずつ出土した。その特徴から古墳時代後期のものと考えられる円筒埴輪であり、なぜこの場所から出土するのかが議論の対象となろう。一つの考え方として、本調査区周辺に円筒埴輪を樹立した古墳時代後期の大型古墳が存在した可能性が考えられる。本調査区が所在する城山は独立丘陵であり、古墳が営まれる場所としては好立地といえる場所であるが、仮に古墳が営まれていたとしても、16世紀末の宇土城（城山）の築造に伴い、破壊されたものと考えられる。その破壊された古墳の痕跡が今回出土した2点の円筒埴輪片と考えることも可能であろう。ただし、別の考え方として、これらの円筒埴輪片が宇土城（城山）の造成・整地に伴い、他所から土砂とともに運ばれてきた可能性もある。いずれにせよ、今回出土した2点の円筒埴輪片はどちらも遺構から遊離して出土したものであり、元々この場所に樹立されていたものか、あるいは、他所から運ばれてきたものかの判断には慎重を要する。今後の検討課題といえる。

### 参 考 文 献

- 宇土高等学校校誌編纂委員会編 1991 『宇土中学高校七十周年記念誌』宇土高等学校七十周年記念事業実行委員会
- 宇土市 1975 『宇土市史』臨川書店
- 宇土市教育委員会 1981 『宇土城跡（城山）－宇土城跡（城山）調査概報（1）－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 宇土市教育委員会 1982 『宇土城跡（城山）－宇土城跡（城山）調査概報（2）－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 宇土市教育委員会 1985 『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 宇土市史編纂委員会 2002 『新宇土市史 資料編 第2巻 考古資料・金石文・建造物・民俗』宇土市
- 宇土市史編纂委員会 2003 『新宇土市史 通史編 第1巻 自然・原始古代』宇土市
- 宇土城三ノ丸跡発掘調査団 1982 『宇土城三ノ丸跡－弥生前期のV字溝と近世城郭遺構の調査－』
- 木島孝之 2001 『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会
- 高木恭二 2000 「宇土城の縄張り」と小西行長の町づくり』『小西行長公没後400年記念事業資料集』宇土市教育委員会
- 鶴嶋俊彦 2003 「近世の宇土城跡」『南九州の城郭－南九州城郭談話会会報－』南九州城郭談話会

法量 ( ) は復元値

挿図 番号	器 種	出土地点		法量 (cm)			色 調	胎 土	焼 成	残存部	備 考
		地区	層位	口径	底径	器高					
第5図 1	甕	13区	2層	—	(6.8)	5.0~	外面:にぶい黄橙 10YR5/3 内面:にぶい黄橙 10YR7/4	長石・石英・黒色 粒・赤褐色粒	良	胴部~ 底部	ナデ、底部の1/2残 存
2	台付き甕	13区	攪乱	—	(10.6)	8.0~	外面:橙 5YR7/6 内面:橙 7.5YR7/6	長石・雲母・角閃 石・赤色粒	良	胴部~ 底部	不定方向のナデ、底 部の1/4残存
3	台付き甕	15区	攪乱	—	—	5.3~	外面:橙 5YR6/6 内面:橙 5YR7/6	石英・長石・黒色 粒	良	胴部~ 脚部の 一部	外面はタテ方向の ハケメ、底部内面に 不定方向のハケメ
4	円筒埴輪	13区	2層	—	—	7.9~	外面:浅黄橙 10YR8/3 内面:にぶい黄橙 10YR7/4	石英・長石・角閃 石・雲母・赤色 粒・黒色粒	良	胴部の 一部	タテ方向のハケメ、 不定方向のナデ、突 帯
5	円筒埴輪	4 T	—	—	—	7.85~	外面:橙 5YR7/6 内面:橙 5YR7/6	石英・長石・角閃 石・黒色粒・赤色 粒	良	胴部の 一部	H19年度確認調査 時出土。タテ方向 のハケメ、不定方向 のナデ、突帯
6	皿 (土師器)	15区	攪乱	—	(9.6)	1.5~	外面:橙 5YR6/6 内面:橙 5YR6/6	長石・雲母・石 英・黒色粒・赤色 粒	良	底部~ 胴部	ケズリ後、ナデ、ヘ ラ切り離し
7	皿 (土師器)	7区	攪乱	—	(8.8)	2.4~	外面:にぶい黄橙 10YR7/4 内面:にぶい黄橙 10YR7/4	長石・雲母・角閃 石・赤色粒	良	胴部~ 底部	ナデ、糸切り離し
8	皿 (土師器)	3区	攪乱	(7.5)	(5.8)	2.1	外面:にぶい黄橙 10YR6/4 内面:にぶい黄橙 10YR6/4	砂粒・雲母・角閃 石・赤色粒・黒色 粒	良	口縁~ 底部	内外面ナデ
9	椀 (瓦器)	4区	攪乱	—	(7.2)	2.2~	外面:灰白 2.5Y8/2 内面:黄灰 2.5Y5/1	長石・角閃石・雲 母	良	底部~ 胴部	内面ミガキ、外面ヘ ラケズリとナデ、底 部回転ヘラケズリ
10	擂鉢 (瓦質土器)	6区	攪乱	—	—	7.6~	外面:にぶい黄橙 10YR7/2 内面:灰白 2.5YR7/1	長石・雲母・赤色 粒・黒色粒	良	口縁の 一部	6条の擂目、緩い注 口脇に指頭圧痕
11	擂鉢 (瓦質土器)	6区	攪乱	—	—	5.9~	外面:灰 5Y6/1 内面:灰 N5/	長石・石英	良	口縁の 一部	4条(?)の擂目、 斜めの工具痕
12	擂鉢 (瓦質土器)	15区	1層	—	—	6.9~	外面:にぶい褐色 7.5YR5/3 内面:にぶい橙 5YR6/4	長石・石英・角閃 石・黒色粒	良	口縁の 一部	6条の擂目、ヨコ方 向ナデ、不定方向の ナデ
13	鍋 (瓦器)	6区	攪乱	—	—	9.8~	外面:にぶい橙 7.5YR7/4 内面:にぶい橙 7.5YR7/4	長石・雲母・赤色 粒・角閃石	良	胴部	ケズリ後横ナデ、1 条の突帯
第6図 14	火鉢 (瓦質土器)	13区	攪乱	—	—	5.3~	外面:にぶい黄橙 10YR7/2 内面:にぶい黄橙 10YR7/2	長石・雲母・角閃 石・赤色粒・黒色 粒	良	口縁の 一部	菊花文あり、ケズリ 後ナデ、1条の突帯
15	火鉢 (瓦質土器)	15区	攪乱	—	—	8.8~	外面:灰 5Y6/1 内面:黄灰 2.5Y6/2	長石・石英・角閃 石・黒色粒	良	口縁の 一部	菊花文あり、ケズリ 後ナデ、1条の突帯
16	染付皿 (磁器)	13区	攪乱	—	(6.2)	1.5~	外面:灰白 10Y7/2 内面:灰白 10Y7/2	密	良	底部	高台高0.7cm、高台 の削り込み
17	瓦	—	表土	—	—	(厚み) 1.8	凸面:暗灰 N3/ 凹面:灰 N6/	密	良	一部	「筑後 柳河 村田 製 散田」の刻印あり

表3 出土遺物観察表



図版1 調査前調査区全景（西から）



図版2 土層断面（A-A'）



図版3 1区検出状況（東から）



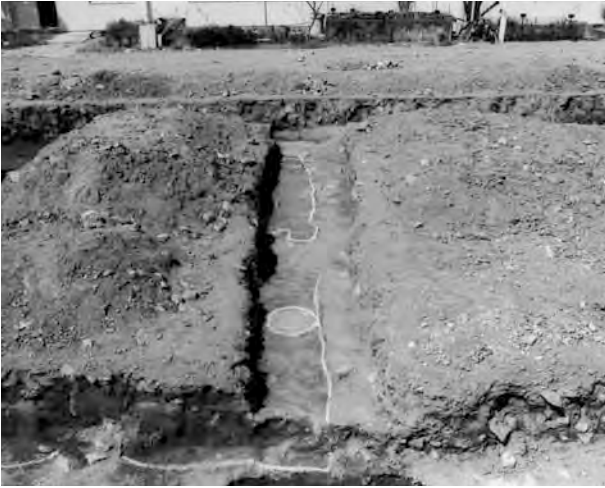
図版4 2区検出状況（西から）



図版5 3区検出状況（東から）



図版6 5区検出状況（北から）



図版7 8区検出状況（南から）



図版8 9区検出状況（南から）



図版9 10区検出状況（南から）



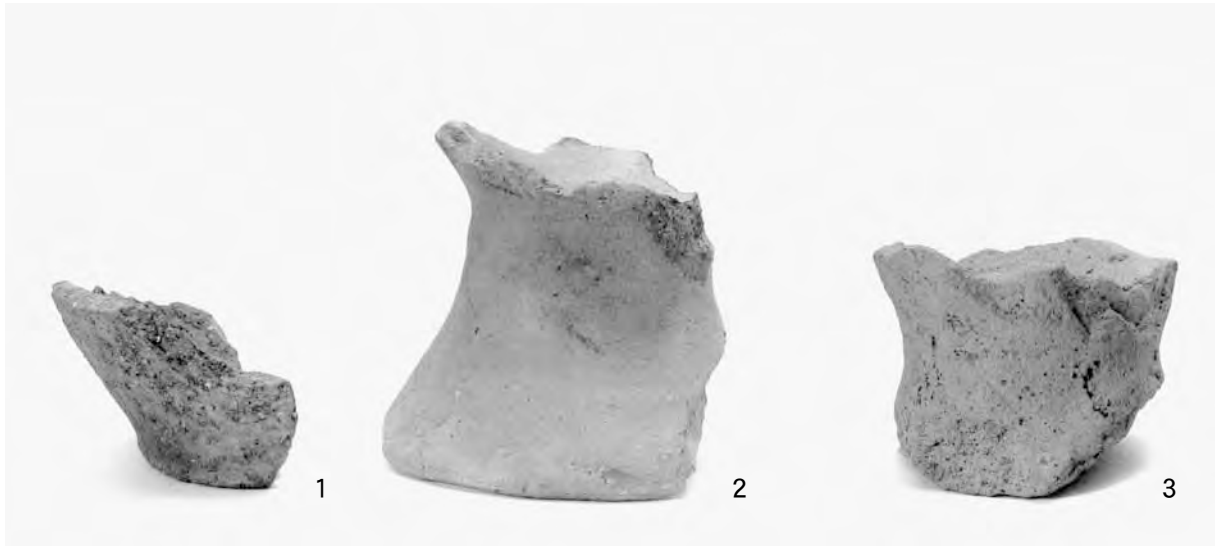
図版10 13区検出状況（西から）



図版11 14区検出状況（東から）



図版12 調査完了状況（西から）



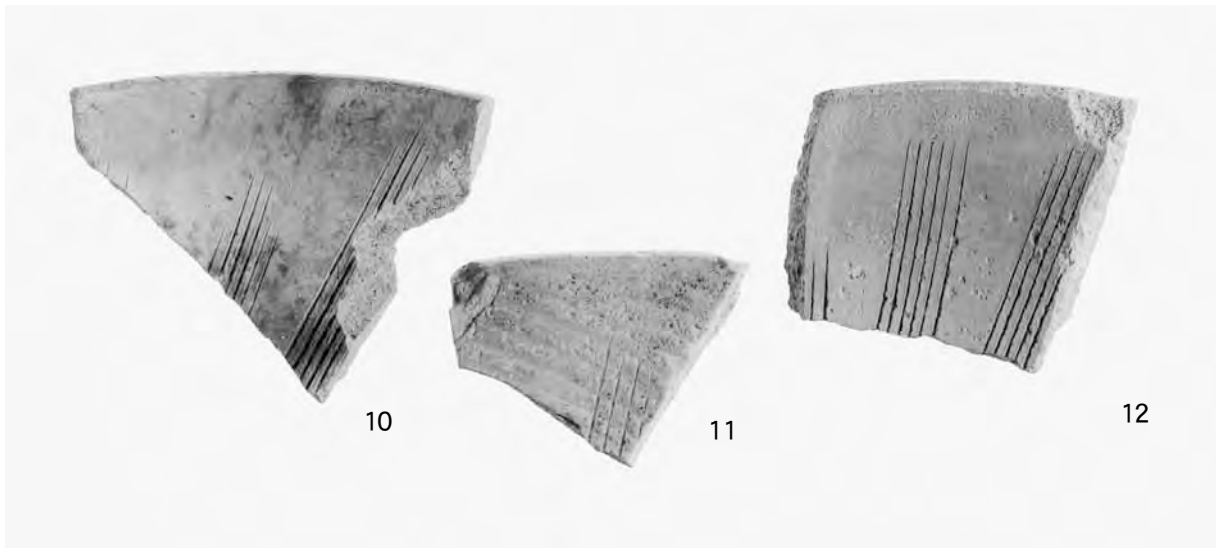
図版13 出土遺物（1）【弥生時代】



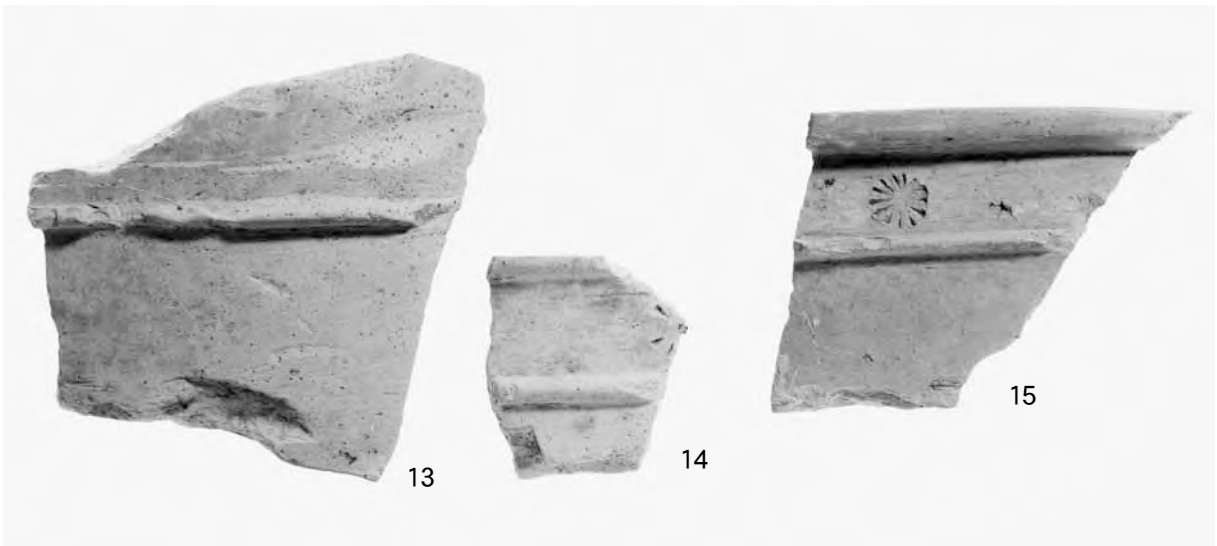
図版14 出土遺物（2）【古墳時代】



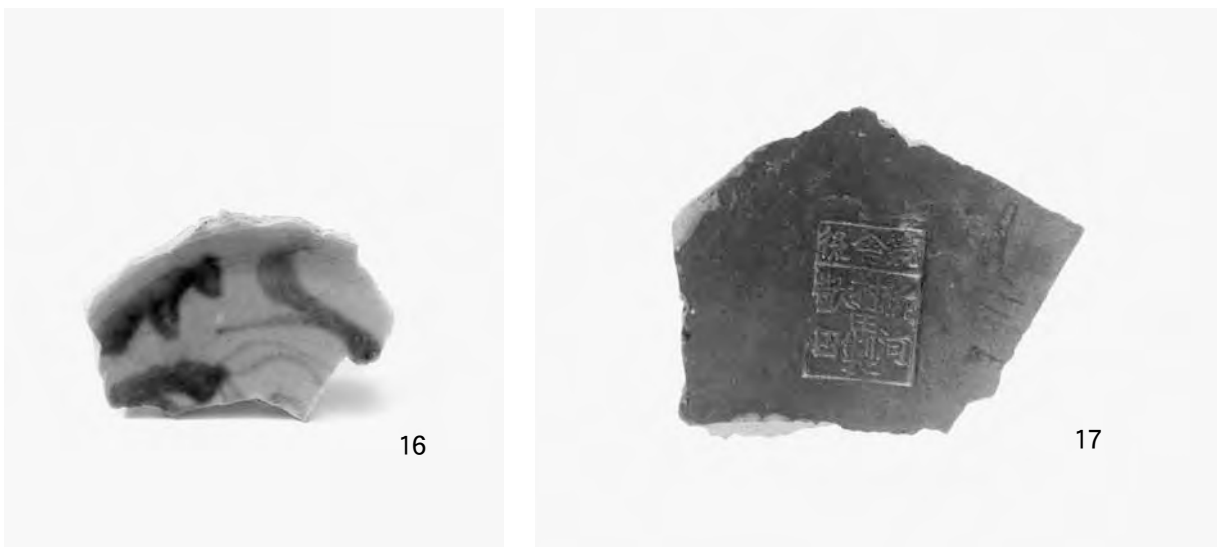
図版15 出土遺物（3）【中世】



図版16 出土遺物（4）【中・近世】



図版17 出土遺物（5）【中・近世】



図版18 出土遺物（6）【近世・近代】



## 報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと（しろやま）
書名	宇土城跡（城山）
副書名	熊本県立宇土高等学校併設型中高一貫教育施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第259集
編集者	能登原 孝道
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号 TEL 096-383-1111(代表)
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うとじょうあと（しろやま） 宇土城跡（城山）	くまもとけんうとしこじょうまち 熊本県宇土市古城町	43211	055	32度 40分 50秒	130度 39分 15秒	2009.3.2～ 2009.3.31	441㎡	校舎建替

所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇土城跡（城山）	弥生  古墳  中・近世    近代		弥生土器  円筒埴輪  瓦器椀  土師皿  瓦質土器  染付皿  瓦	

要約	<p>宇土城跡（城山）は、県立宇土高等学校内における校舎建替に伴い発掘調査された近世の城跡を主体とする遺跡である。調査において、宇土城（城山）の築城あるいは改修に伴うものと考えられる整地層を確認した。また、中・近世の土器類のほか、弥生土器や古墳時代の円筒埴輪などが出土した。</p> <p>小西行長が築城し、加藤清正によって改修された宇土城（城山）の構造等を知る上で重要な成果を得た。</p>
----	--

熊本県文化財調査報告第259集

## 宇土城跡（城山）

熊本県立宇土高等学校併設型中高一貫教育施設整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

---

発行年月日 2011年3月31日

編集・発行 熊本県教育委員会  
〒862-8609  
熊本市水前寺6丁目18番1号  
TEL 096-383-1111（代表）

印刷 有限会社あすなろ印刷  
〒860-0821 熊本市本山3-3-1  
TEL 096-383-5512（代表）

---

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 259 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：宇土城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日